

「松下電器」 創業100年

好況よし、不況またよし。 風がない日も凧を揚げつづけて——

基本から外れて 仕事をしたらあかん

——まずお聞きしたいのは、松下幸之助翁の人物です。人間的にどんな魅力がある人物だったのでしょうか。

木野 僕は、創業者は“人間の神様”だと思っています。人の心を全部わかっておられる。

谷井 確かに人の心、気持ちというものをよくわかっている方でしたね。

木野 松下電送の社長のときに、創業者から「君な、一度、社長辞

めたらどうや」と言われたことがあります。僕は生意気に「はい。いつでも辞めさせてもらいます」と偉えいそうなことを言いました。すると「君、辞めてどうすんねん」と。これはもつと頑張れということだったのです。だけど、僕はこの「一度」という言葉に救われました。これがなかったら大ショックを受けたと思います。

木野 そうですね。また、こんなこともありました。松下電送は五年の事業計画を進めていたのですが、三年でやり終えました。そのときも創業者に呼ばれました。褒ほ

——恐るべき“人間通”ですね。

木野 そうです。また、こんなこともありました。松下電送は五年の事業計画を進めていたのですが、三年でやり終えました。そのときも創業者に呼ばれました。褒ほ

められるのかと思って何うと、様子が違う。創業者は「五年でやるのを、なんで三年でやったんや」と怒るわけです。僕が黙っていると、「君、計画が甘かったのと違うか。いずれにしても事業計画で仕事をするのが松下の基本や。その基本から外れて仕事をしたらあかん。もう一回、事業計画をやり直せ」と言うのです。

谷井 上の人になるほど厳しかったですね。でも、創業者の本質は、自分に厳しく、人に優しい人柄だったと思います。人を厳しく叱るときは、「こうあるべきだ」とずっと自分を責めていて、その余波がときにその人に向けて出てきたのだと思っています。

もう一つ、創業者はよく人の意見を聞いていました。「うん、うん」と人の意見を聞きながら話の奥にある広がりをつかみ取っておられた。本当に聞き上手だったと思います。

——谷井さんも叱られたご経験はおありですか？

谷井 木野さんほどはないですが



松下電器産業株式会社元社長 谷井昭雄

たにい・あきお 1928年生まれ。56年松下電器産業（現パナソニック）入社。ビデオ事業部長などの要職を歴任し、86年から93年まで社長（4代目）。日中経済貿易センター名誉会長。著書に『松下幸之助 ものづくりの哲学 どんな時にも、道はある』（PHP研究所）がある

撮影 丸川博司